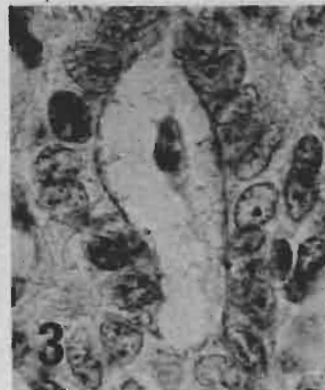
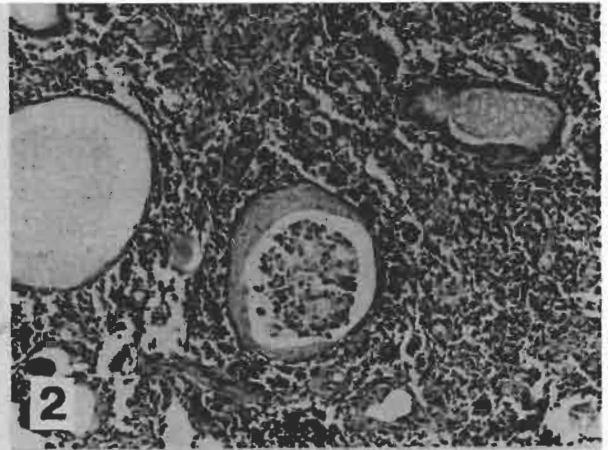


犬の腰髄

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.521



動物：四国犬，雄，2歳。

臨床的事項：右後肢のKnucklingを主訴に上診。約2ヵ月後には左後肢のKnucklingがみられ、脊髄造影で椎間板ヘルニアが疑われた。その後元気、食欲低下し、初診後約4ヵ月の経過で死亡。

主要剖検所見：1)左右臀部、右腹部及び陰嚢皮下の水腫。2)胃～小腸全域の粘膜面と脾表面・断面の散在性点状出血及び出血性膀胱炎。3)脊髄腰膨大部背索中央の径約2mmの灰黒色点。L1・L2間約2cmにわたる横断面ほぼ全面の黄白色調化、L2近位部での病変は縮少。髄膜、外形及び椎骨に著変はなかった。

組織学的所見：腫瘍組織全体及び内部は菲薄な、所によっては血管の発達した幅広い結合織により被包～区分されていた。腫瘍組織は明調で乳頭状腺腫様構造を示す部と、暗調で腎芽細胞腫様構造を示す部から成り(写真1, HE, ×28)、互いにそれらが交錯している部分も多かった。明調部は細胞質が比較的豊富な弱好酸性～空胞状の一層の立方～円柱上皮細胞による小管腔形成や管腔内への乳頭状増殖を示し、腔内には好酸性のコロイド様物質(PAS陽性, Mucicarmin不染, Van Gieson黄染)

を満していた。一部には嚢状拡張部やサイトケラチン陽性の扁平上皮化生を示す部もあった(写真2, HE, ×70)。一方暗調部には多角形の細胞質に乏しい細胞のシート状増殖部のほかに、紡錘形細胞の渦巻状増殖部があり、これらの細胞間には1～数層の好塩基性細胞質を持つ立方～円柱上皮による小管腔構造(ロゼット形成)や原始糸球体を思わせる乳頭状増殖も認められ、有糸分裂像も多かった。以上の明・暗調部構成細胞の核は円形～卵円形で、小さな1～数個の核仁を有していた。さらに明調部には表面に繊毛を有する細胞(写真3, PTAH, ×1,120)やS100蛋白陽性細胞が存在し、一部の明・暗調部の管腔形成細胞質には生毛体(写真4, PTAH, 矢印, ×700)が認められた。グリア線維性酸性蛋白は陰性であった。**考察及び診断：**本腫瘍は形態学的には腎芽細胞腫様構造あるいは見方によっては奇形腫様構造をとるなど問題点は多かったが、①ロゼット形成、②繊毛・生毛体が認められることから、診断名は上皮型上衣細胞腫として提示したが、サイトケラチン陽性の扁平上皮化生が見られる点からNeuroepitheliomaという診断名が与えられた。